



家長

三浦朱門

160581

家長 三浦朱門



家長

平成二年十二月二十日 第一刷発行

定価はカバーに表示しております

著者 三浦朱門

発行者 豊田健次

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三ノ二十三
郵便番号一〇二
電話東京（〇三）六五—三二（大代表）

印刷所 大日本印刷
製本所 矢嶋製本

© SHUMON MIURA 1990

万一、落丁、乱丁の場合はお取替いたします

ISBN4-16-312240-0

Printed in Japan

目次	
鍵のかかる部屋	5
冬の初め	31
肌着	73
柿	93
独り言	121
かまきり	139
家長	165
夢	198
後書き	223

家長

A 装
D 画
中 生
島 井
か 蔵
ほ り

鍵のかかる部屋

一

雨戸を閉めきった三畳の書齋にいと、予定通り八時半に大阪の姉から電話がかかってきた。姉の文枝は夫、つまり義雄の義兄の宏が仕事で帰りの遅い夜、よくこうして電話をかけてくる。もっとも用があつて義雄が家にいないことがあつても、それだけのことだった。電話料は姉が払う。姉は女子大で教えていて、自分の収入があるから、夫の手前、大阪・東京間の電話代にハラハラしない程度に金があるのだらうが、やはり淋しいに違いない。

「義雄？」

「ええ」

「どう？」

「今年は芝がダメになりましたね」

「ふーん、どうダメなの？」

芝生は五月の半ばになつても、枯れたままの部分が残つた。それは禿げかけて毛がまばらになりかけている義雄自身の鬢びんのように心許なかつた。芝は去年の夏から生え方に勢いがなかつた。東半分はそれほどでもないが、西半分は真夏でも緑の葉よりも枯れた部分が目立つた。芝刈機を押してゆくと、東半分は抵抗が強く、心臓が苦しくなるほどなのに、西半分に来ると、空車を押すように、芝刈機は進む。

今年は四月ころから雑草が多かつた。禾本科系かへんかの二、三種は昔から見なれてゐるが、クローバや豆科らしい雑草が四種類ばかり、そのほかマツバボタンに似たものがあつて、それらを丹念に取つたら、芝生は月の表面の写真のようになった。

雑草のおかげで弱つたのか、芝が弱かつたから雑草がふえたのか、どちらが鶏で、どちらが卵であらうとも、芝がダメになりかかつてゐることは確かだつた。

若い時、高原の療養所にいた義兄に言わせると、その火山灰地の療養所では、雑草を刈つて、刈つて、刈りつくすと、最後にその土地に固有の芝が残つたのだという。専門家でもなく、園芸に特に趣味があるとも思われない宏の言葉を、義雄は信ずる氣にならなかつた。それを言うと、相手の声は氣色ばんだ。

「ヨーロッパを見る。あそこは日本みたいに植物が自然に繁茂する土地じゃないんだろうが、刈っているだけでいい芝じゃないか。スコットランドなんか、天然のゴルフコースみたいなのがあるし、箱根あたりでも、熱海のはいい芝生で……」

義雄もスコットランドや箱根の草原を見た記憶があるが、どちらも車の窓から見たのだし、ま

だ芝生に關心はないころだったから、あ、草原だと思っただけだった。それは宏が言うような芝生ではないように思ったが、反論する根拠がなかった。義雄が煮えきらない受け答えをする、
「ウチが言う通りじゃない？ その土地に自生したもんじゃないから、手入れを怠れば枯れてしまふのよ。そうでなくとも、移植した芝は寿命みたいなものがあるんじゃないかしら」

「女房のおやじがはじめたんだから、四十年、ええと、五十年近いなあ。いや、十年ほど前に途中でやはりなおしたけど、結局、古い芝も新しい芝と一緒になってきたんだし」

「寿命よ」

姉は念を押すように言った。

「そうかな」

「芝はもう植えられた時の役目は終わったのよ」

そうかもしれない、と義雄は思った。彼の家の建っている土地には妻の映子の父が五十年近く前に建てたのがあったが、七年前、彼が亡くなってから、家の方は建てかえた。古い家の一間を移築して、そこに映子の母の松子が住んでいる。そして映子自身は三カ月前から、仕事でアメリカに出張している。義雄たちの間のたった一人の子供の一郎は去年、地方の大学に入ってから、近ごろではその地方都市に根が生えかけたのか、休暇でもあまり家に帰ってこない。

このようにして考えてみると、映子の父がたった一人の娘に養子をむかえて、と考えて建てたこの家は、所期の目的が達成されないままに、解体された。そして今の家族構成は死んだ老人の意思の継承でもなく、かといって、新しく別の意図を持った家族が現われたのでもない。つま

り古い芝の上に一部はりなおした芝だった。

古い芝は家の改築の時にひどく傷んだので、その上に新しく芝を植えた。半年で古い芝と新しい芝は見分けがつかなくなつたのに、それが今はもう雑草に侵食されている。新しい家も、それを建てた時の家族構成やそれに基づいた生活設計はくずれようとしていると義雄は思った。役目が終わったのは芝と七年前に古材になつた家ばかりではなかったかもしれない。そんなことを考えだすと、義雄は姉との電話に気乗りしなくなつた。

「姉さん、九時から、テレビで映画見るから電話は切るよ」

「そう？ 何やってるの」

「スバイ喜劇らしい」

「こつちでもやってるかな。じゃ私もそれを見よう」

電話が切れた。しかし義雄はテレビのある寝室に行かずに、しばらく書斎の机の前で、クリーム色の電話機を眺めていた。

それは家に老人がいるからと映子が主張して、外線とつながつた電話ではあるが、広くもない家の中の各部屋との室内電話にも使える式のものだった。しかし今、六つある電話機で、義雄が呼んで答えがあるのは、松子の部屋だけだった。一郎の部屋は誰もいない。隣の映子の書斎も人がいない。居間も、義雄夫婦の寝室も無人である。

もっとも、家の中にはもう一人映子の死んだ父の遠縁の、留子という女がいる。彼女が夫を失つて、義雄たちと一緒に暮して家事を引き受けてくれるようになってから四年になる。そろそろ

六十に近いはずだが、彼女は七十六の松子とあまり仲がよくない。最大の原因は松子が留子を傭人だと思っているのに、留子には妙なプライドがあるためだった。留子としては確かに毎月の金をもらってはいるが、それは手伝いの給料としては安すぎるし——それはその通りだった——一種の奉仕の精神から、家族の一員になっている、という気があるのだった。

確かに留子がいなければ、三度の食事はもとより、洗濯も、家の掃除もやりてがなくなってしまう。義雄たちは身寄りのないという弱味につけてこんで、初老の女を安い金でこき使っていると、言つて言えないことはないのだが、彼女の奉仕の精神も困ったものだった。たとえばお惣菜が心細くて、それを補うつもりでコーンビーフの缶を空けると、それがなくなるまで三食でも四食でもコーンビーフばかり。しかも松子や留子はあまり好きではないという理由で、義雄が一人で食べなければならない。それに限らず、同じお惣菜を何食でも続けて喰わされるのは閉口だった。「もったいないから、上つていただきます」

と言われれば、仕方なく箸をとるのだが、留子の高圧的な態度がいよいよ腹にすえかねると、義雄は駅前の中華料理屋に、その近くの新聞販売所の店員たちと一緒に、丼物などを食べにゆく。留子は自分が総入歯でみっともない食べ方をするから、人と一緒に食事ができないという。松子は体が不自由で自分の部屋までは膳を留子に運んでもらう。つまり、この家には目下、三人の人間がいるが、三人とも銘々一人で食事をするのだった。

無理もない、と義雄は思う。彼はあと二年ばかりで五十になるが、三人の年齢を平均すると、六十をこえるであろう。この家自体がもう養老院みたいなものだと思う。映子がいれば、同じコ

インビーフにしても、何とか料理法を考えるだろうが、留子ときたら、それを一缶全部、玉ネギと一緒にいためて、後にそれを何度でも温めなおすばかりだ。

一郎がいれば、ギョウザが食べたいとか、天ぷらにしようとか言うし、すくなくとも彼は他のすべての家族の血縁になるから、彼の注文した料理をみんなで食べることができた。そのころから、松子と留子は一人で食事をしていたが、それでも同じ物を食べているということから、一つ釜のメシを食うという感じがあったように義雄は思う。しかし、一郎と映子がいなくなつてみると、義雄と松子と留子の間にあるのは、義理の関係ばかりだった。三人が食べる物も、いつの間にか違つてきてしまった。本来、家族になるべきでない三人の人間が、仮の家族を作っているのだった。生活の便宜のため、もう一つには一郎が目に見えない中心になつて、その一点を通じて結びつけられているという自覚のために、生活を共にしてきたのだが、一郎と、さらには映子がいなくなつてみると、「同じ家に住む家族」という嘘が今では覆いかくしがたい状態になつてきた感じがある。その証拠が三人で別々にとる食事であつたし、三人が事務的なこと以外、ほとんど口をきかないということでもあつた。

二

「奥さんいらつしやらなくてお淋しいでしょう」

と義雄はよく人に言われる。人が皆そう言うから、こういう状態を淋しいというのだろう。しかしこれが淋しさというのなら、淋しいということはよいことだ、という気がする。

夫婦とも勉強し、時に文章を発表することを仕事にしていたが、分野が違うために、最初から書齋を別にしていた。そしてもし、同じ書齋にしていたらたまらなかったと義雄は思う。映子は一日中机に向かうタイプで、家にいて炊事をしている時でも、玉ネギ、ひき肉、などと書いた黒板に、仕事のメモを書きつける。寝室にも本を持ちこみ、夜おそくまで、センペイをかじりながら読んでいる。それが義雄には負担だった。彼は書齋を出たら、原則として、仕事から頭を離そうとしている。だから映子にそばで勉強されると、自分が怠けているようで、落ちつけず、しばしば眠れなかった。しかし、たった一人の今、書齋は書齋、寝室は寝室。それは整然と別の世界を作って、義雄の精神を不当にかき乱すことはない。

結婚してから当分の間、松子が家事を引き受けてくれたし、彼女が年をとって働きにくくなったところには、人を備える程度の収入を義雄たちが得ていたとはいえ、映子は主婦であつたし、家事から完全に解放されることはなかった。一つには自分が仕事を続けるために義雄を媚養子みたいに自分の実家に引っぱりこんだという負い目もあったのだろうが、松子が一切の雑用を引き受けていた当時でも、映子は家事をやっている素振りだけはしていた。たとえば松子が作った料理を運んだり、すでに洗いあげられている洗濯物を、自分で洗ったような顔をして干したり。それはあるいは松子の入れ智恵だったかもしれないが、娘時代から映子はその程度の手伝いはしていたのだろうとも義雄は考えた。

とにかく、主婦としての義務感が作り出した勉強法なのだろうが、映子はシチューを煮ながら、台所の調理台に、本を置いて勉強する。エプロンをつけたまま、机に向かう。そういう二宮金次

郎みたいな勉強をされると、義雄はいかにも自分が妻の勉強時間を搾取している封建的な男のように思えてくる。いや、意識的でないまでも、映子は男性の支配する社会の中で、手足を鎖にながれたまま、奮闘している女性英雄を気取っているのではないかとさえ思うことがあった。

しかしまた、彼女が料理が好きなのも間違いない。外に何の趣味もないから、一日中、本をかかえて二、三ページ読んで魚を焼き、十ページ読んで買物に行きというのが、彼女の生活のテンポとして固定して、家事をすることが気分転換にもなっているようだった。朝目をさましてから眠るまで、密度はともかくとして、ずっと勉強している、というか、自分の仕事から完全に離れることはないという生活を脇から見ていると、義雄は殊に氣力の弱まっている時など、圧倒されそうな氣持になる。

そうは言っても、一人一人勉強のやり方が違うから、義雄が映子のように、一日中やっけていても能率が上がるどころか、何のために女房の真似をしているのだらうなどと、虚無的になるばかりだった。客から、

「奥さまはオビニオン・リーダーとしても、妻としても、また母としても、立派におやりになって……」

と言われると、それがお世辞だとは知りながら、義雄としては、「だから困るんですよ」とも言えず、苦笑するより仕方がなかった。そして、立派にやったかどうかは論議の分れる所だが、学者、言論人として、また妻、母として、破綻をきたさなかったのは事実であるが、その陰には彼女の良妻賢母ぶりに耐えてきた義雄と一郎がいることも忘れてほしくないと言いたかった。

いや、耐えてきた、とまで言つては酷であろう。映子が奮闘していることはよくわかつてゐる。またそれがよいことだと思ふから、つい義雄も一郎も心にもなく奮闘してしまつた所がある。一郎が地方の大学に行つた氣持も、その点ではわからないではない。一郎も自分の生活のペースを発見するためにも、一人で暮したかつたのであろう。

だから、米国の法廷で國際的な裁判がおきて、長期になりそうだが、行つてもいいだろうかと映子が申し訳なさそうに言い出した時、義雄は怪しからんとも困つたとも思わなかつた。自分が外国へ行く時のように、面倒でわずらわしい、という氣持と共に、案外にそれも楽しいかもしれないと期待のようなものすら持つたのであつた。

米国に行つた映子からは、最初のうちは、時差の加減で睡眠時間が狂つてしまい、一日中頭がはつきりしないとか、家族も雑用もないと、何だかボンヤリしてしまつて、かえつて仕事ができない、などと不平まじりの手紙が来ていたが、裁判の關係者たちとの交渉がはじまるようになって、彼らとの交渉を通じて、日本でのテンポが戻つてきた様子だつた。同行の日本人たちに手伝わせて日本食を作つたり、身上相談の相手をしていると書いてきた。

映子がいなくなつた当座、義雄の生活は快適になつたように思つた。朝四時に起きて、七時まで勉強し、それから食事して新聞を読んでから大学に行く日はそのまま家を出、講義のない日は昼まで勉強する。それだけで一日分としてはかなりまとまつたことができる。午後は運動したり、雑用を片付けたり、軽い本を読む。夜は勉強と言つても、翌日の下準備をしながら、十時か十一時には寝てしまふ、といった生活は、軍隊か修道院の生活のようで、義雄はこれも悪くない、と

思った。

しかし、そうよいことばかりではなかった。これまでは朝、六時ごろ起きると、二人でしわになったシーツをのびし、毛布をマットレスにたくしこんで、いつでも寝られるように、いわゆるベッド・メイキングをやっていた。簡単な作業ではあるが、寝た時の毛布の長さは裾のたくしこみ方によってきまるし、毛布が直接、首筋や頬に当たらないために、上掛けに使うシーツをどの程度深く折り曲げるか、といったことは、個人の癖や好みによる部分が多い。長年自分でやっていると、誰がやっても同じことだという固定観念ができてしまうのだが、決してそうではなかった。

映子は出発前に留子に義雄のためにベッド・メイキングをしてくれるように頼んでいた。家族が少なくなつて、それだけ用事がへるだろうから、その程度のこととはしてやつてくれということだった。しかし、留子は、

「そりゃ、勿論、男の方にそんなことをしてもらう訳にはいきませんからいたしますとも。けれど、映子さんがいないからといっても、食事は三度三度作るんですし……」

と自分の仕事が暇になると言われたことに不満な様子だった。

それに対する意趣返しではあるまいが、留子のベッドの始末はうまくなかった。元々ベッドなど使ったことのない者に頼むのが無理だったのかもしれない。横になると、毛布が脇の下あたりまでしかこないこともあった。それを引きあげようとすると、マットレスにたくしこんだ毛布がはずれて、寝返りを打つ度に裾の方から冷たい風がスースー入ってくる。そのことを言えば、今度は頭までかぶれるほど毛布の長さがたつぷりするのはいいとしても、上掛けのシーツの折返し